D.　竪穴住居の出入口小考

—弥生時代から古墳時代を中心として—

1．はじめに

竪穴住居内に付属する諸施設には種々な使用法があり，しかもそれらに与えられる機能は当時の生活と密接に結びついていた。例えば屋内土壙（南乃至東壁際に掘られた土壙）は生産用工具に関係する作業穴的な要素が与えられ，住居の一隅，例えばベット状遺構上に見受けられる土壙は屋内貯蔵穴か飲料水を甕か壺に溜めるための土壙としての用途の可能性が強いことを指摘した。(註2) 壁沿いに廻らされた壁溝は壁の崩壊を防止する板材を埋込むための掘形の他，小原遺跡18号住居等のように湧水を住居外に排水する排水溝的な役割も果たしていた。(註3) 住居の下部構造をみる限り，この様に付属施設の各々に当時の人々の英知が生かされていたことに今さら乍ら驚かされる。(註4)

今回報告した立野遺跡においては遺存状態の良好な135号竪穴住居跡から付属施設の１つである出入口が明瞭な状態で遺存しており，この出入口の発見でその構造を知る好資料となり得たと同時に竪穴住居の上部構造における復原の一助となるとも考えられることから，この頃では今日まで不明確であった竪穴住居の出入口について整理してみたい。この項で取扱う遺構の中には全て出入口と判断するには若干の問題を残す遺構もあるが，可能性が考慮されることからも含めて説明したい。

2．出入口の分類と実例

(1)　円形竪穴住居跡

弥生時代の円形住居の床面上には数本の主柱を建てた柱穴跡が認められるが，その数は４本から８本程度が普遍的である。しかし，弥生時代の竪穴住居の上屋構造は円錐形の葺降し的な上屋の他に，葺降しの上に簡易な切妻状の上屋を覆った形態も存在した様だ。この場合，棟持柱が当然必要であるにも拘らず，棟木方向の不明な住居が多々あるのも事実である。その中にあって棟方向がある程度判断できる例がある。例えば合の原遺跡の２号住居（文献１）にみられる様な住居の中央穴を狭む形で主柱穴よりも細みの２本の柱穴が掘られており，棟持柱として機能していたと考えられる。この２本の柱を結ぶ線上に対して直交して設けられた出入口を平入系，平行に近いものを妻入系と考えられるが，円形住居の場合方形乃至長方形住居に比較して判別し難い点が多々あることから，形態状の差で便宜的に「円Ａ」～「円Ｃ」に区分が可能である。

円Ａ（高木タイプ）　円形住居Ａ高木タイプは住居の遺存状態が不良のため詳細は不明な点が

多いが，高木遺跡４号住居（文献２），手坊谷遺跡13号住居（文献５）でみられるように円形に廻る壁溝の一部が途切れ，その両翼に上屋を支える小柱穴２本を配したものである。このタイプには他に手坊谷遺跡の７号・12号住居の様に小柱穴が認められない例もあり，壁高が低いことから削平されたものと推考される。ともあれ，円Ａ高木タイプは次に説明する「円Ｂ合の原タイプ」と同形態の出入口が著しい削平を受けた可能性が強い。

円Ｂ（合の原タイプ）　合の原遺跡５号住居（文献１）を標式とする。このタイプは円形住居の一部に階段状の張出し部をつくるが，床面上には高まりは認められない。その両翼には不規則ではあるが，上屋を支える小柱穴を配している。同タイプの出土例は熊本県阿蘇郡西原村所在の谷頭遺跡６号住居（文献４）に類例を求めることができよう。しかし，谷頭遺跡の例は合の原タイプに対して張出し部も小さく，屋外に上屋の支柱穴はみられない。

円Ｃ（合の原タイプ）　合の原遺跡４号住居（文献１）を標式とする。このタイプは住居プランに張出し部をつくらないもので，住居壁際の床面に粘質土で小規模の高まりを設け階段状に設置しており，高まりの上面は硬く踏締められていた。この階段状の高まりに接する形で深さ13cmの浅い掘込みがあり，昇降口の踏台を埋込んだピットと解釈できよう。踏台の痕跡は牟田辺遺跡47号住居（文献３）に出土例があるが，牟田辺の例は円Ａタイプの出入口である。

(2)　方形・長方形竪穴住居跡

方形乃至長方形竪穴住居での出入口には平入系と妻入系がある。長方形住居の場合長軸に沿って２本の主柱を建てるのが普遍的な柱配置であり，棟木も主柱の主軸線上に構築すると推測できることから，長辺に設ける出入口は平入系であり，棟方向に平行する出入口は妻入系となる。上屋構造は切妻造りか入母屋系造りの可能性が強い。

方形住居の場合４本の主柱を建てる例が多く，住居の上屋構造は奈良県佐味田宝塚古墳から出土した家屋文鏡にみる様な切妻屋根を合わせた錣葺状の入母屋造りや寄棟造りと推測されるが，下部構造では棟方向の把握が困難である。しかし，弥生時代の長方形住居の長辺壁際に付設される屋内土壙が必ず平側（長辺側）に掘られていることから，方形住居においてもその配置は踏襲されると推考でき，方形住居においても屋内土壙を付設する方向の壁を平側とすることができよう。以上の事を配慮すれば，方形・長方形住居の出入口は分類表で示した様に「方Ａ」～「方Ｄ」(註５)の形態状の分類が可能となる。

方Ａにはａ階段・平入系（以下方Ａ－ａとする）とｂ張出・平入系（以下方Ａ－ｂとする）とがある。さらに，方Ａ－ａには立野タイプ・金山タイプに細分でき，方Ａ－ｂは坊野タイプ西中ノ沢タイプに区分される。

「方Ａ－ａ」

（立野タイプ）　報文中で述べた様に立野遺跡135号住居跡で検証されたタイプで，平側の西寄りに張出し状に黄色粘土を厚く貼り，階段状に仕上げたもので張出した粘土の表面は硬く踏固

められていた。出入口を設定した住居の位置としては西側のベット状遺構と南壁沿いの屋内土壙との間に付設している。出入口左翼には上屋を支える小柱穴を掘っている。同タイプとしては楠野（C地区）1号・5号住居（文献16），牟田辺50号住居（文献3）がある。

（金山タイプ） 金山遺跡12号住居（文献6）を標式とする。住居の北西壁中央部の床面に粘土で段階状の高まり部をつくり平入系とするタイプで，立野タイプに対して簡略的な構造となる。このタイプの場合竪穴住居の壁が高過ぎると昇降時に無理が生じる。張出しの上屋支柱穴はみられない。

（坊野タイプ） 坊野遺跡2号住居（文献7）を標式とする。長方形の竪穴住居の北側長辺の中央部に1.55m×1.73mの張出し部をつくり，張出し基部に2本の上屋支柱穴を掘るタイプで，支柱間には細い溝状遺構を配している。張出し部は北側に設置し，立野135号住居にみられる納屋的な施設が推測されるが，岡山県女男岩遺跡の弥生時代終末の溝から出土した家形土器の出入口の表現方法と酷似していることから平入系の出入口の可能性が強いといえる。さらに，両翼に配する2本の上屋支柱穴間に細い溝を掘っており，出入口の踏台を埋置していたことも推考できる。大板井遺跡29号住居（文献10），上々浦16号住居（文献11）に同タイプがみられるが踏台等の痕跡はない。

（西中ノ沢タイプ） 西中ノ沢遺跡5号住居（文献7）を標式とする。このタイプは張出し部を平側の隅に設け，張出・階段状を呈する。西中ノ沢5号住居の例では張出し部周辺に柱穴等は見当らず，出入口か否かは判断に苦しむが，立野135号住居と同様の納屋的機能も考えられる。上今遺跡1号住居（文献16）に類例が求められる。

方Bはa階段・妻入系（以下方B－aとする）とb張出・妻入系（以下方B－bとする）とがある。方B－aには池部タイプと小園タイプ，方B－bは道添タイプと楠野タイプに区分できる。

「方B－a」

（池部タイプ） 池部遺跡2号住居（文献16）の形態を標式とする。このタイプは妻側壁の中央部内側に僅かなベット状の高台部をつくり，壁際には幅1.2mの間隔で2本の上屋支柱穴を掘っている。この高台部は幾度となく踏締められたために硬く締っていた。類例は少ない。

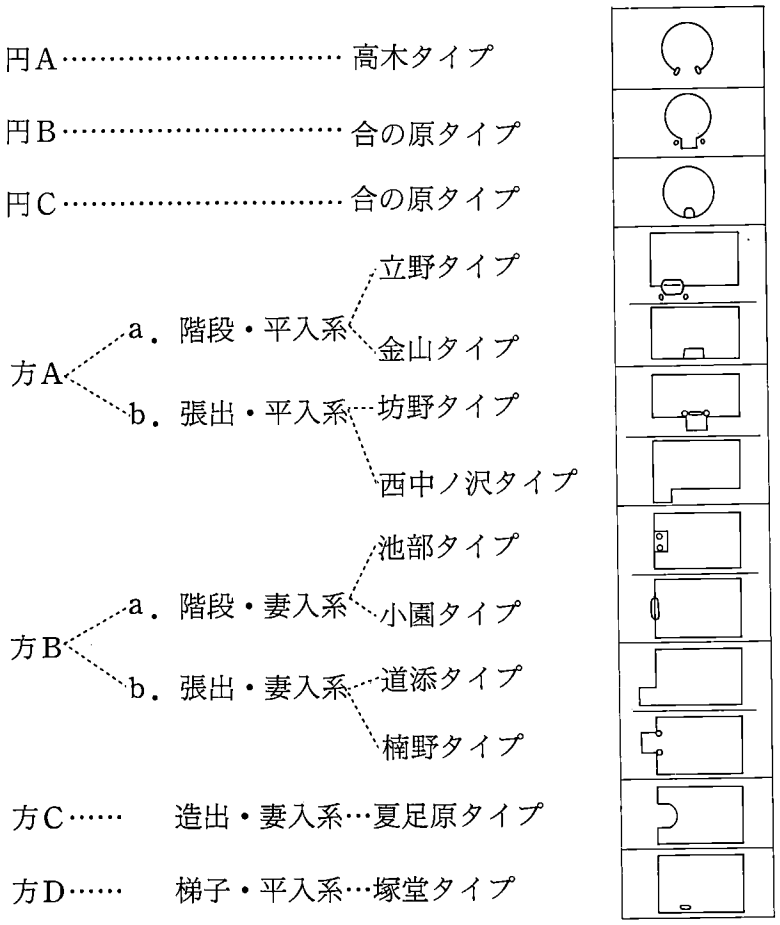
（小園タイプ） 小園遺跡5号住居（文献16）のタイプを標式とする。住居の妻壁側と推察される中央部に幅2.2mの張出し気味の階段状遺構を設け，両翼に2本の上屋支柱穴を掘っている。粘土で立野タイプの階段を造り出していたと考えるのが穏当であろう。柱間は1.75mである。

「方B－b」

（道添タイプ） 道添遺跡14号住居（文献10）を標式とする。このタイプは妻側壁の隅を張出し状に掘り込むもので，道添14号住居の例では張出し部の床面近くに2本の支柱穴がみられるが，外側には小柱穴は認められない。納屋とするには設置方向が南側であることから出入口の可能性が高い。同タイプに西中ノ沢遺跡3号住居（文献7），上々浦遺跡9号住居（文献11）等があり，関

東地方の夏見台遺跡15号住居（文献21）にも認められるもので古墳時代に多く見受けられるタイプである。

（楠野タイプ） 楠野遺跡１号住居（文献20）を標式とする。楠野遺跡では他に５号・12号・15号住居にも同タイプが検証されている。このタイプは妻側壁と考えられる中央部に奥行80～90cm，幅1.80m～2.10mの張出し部を設け，その両翼基部には２本の上屋支柱穴と推測されるピットを配している。しかし，この検証例は納屋的用途も推考できるが，前述した岡山県女男岩遺跡出土の家形土器に表現された出入口が存在することから，一応住居の出入口と考えたい。



第396図　竪穴住居の出入口の分類

「方C」

(夏足原タイプ) 夏足原遺跡2号住居(文献13)を標式とする。このタイプは地山の削り出し部を妻側中央部に造出すもので,同タイプは小園遺跡4号住居(文献16)に見出すことができる。両例とも造出し部と現存の壁高部が段差を有しておらず，本来の壁高を推考すれば階段状に構築していたと考えることができよう。

「方D」

(塚堂タイプ) 塚堂遺跡E地区6号住居(文献17)を標式とする。塚堂の例では住居跡中央付近の平側壁際に楕円形のピットを掘り,ピットの底面は特に細くなる。しかも,ピット内の上面には小石を平面形状に沿って配しており，住居の出入口に使用した梯子の固定穴と解釈できよう。類例では松木遺跡27号住居（文献18）に求めることができるが，同タイプの発見例は北部九州地方では稀である。

3．形態と設置方向

弥生時代における円形住居の上屋構造は前述した様に円錐形であったと推考されており，伏屋の棟じめに尖丸屋根が用いられていた。これに対して方形系統の住居の上屋は方形造りと寄棟隅丸屋根の他，奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡から入母屋造りの祖型的な形態が考えられている。(註6) 入母屋造りは特にカマドを付設する段階には有効的な構造で，煙出しや湿気抜きに優れた特徴を示すものである。これらの上屋構造の中には当然切妻造りも採用されていたと考えられる。

前項では検証された住居の中で出入口と推考される遺構の設置方法等から構造的分類を試みたが，出入口の構築方法も一様ではなく，7方式13タイプに細分が可能となった。

弥生時代の円形住居でみると類例の乏しさから断言はでき兼ねるが，円Bと円Cが基本的なパターンと考えられ，方形系統の住居例に比較して出入口に創意工夫が認められず，単に張出し状の階段乃至は簡易な階段状の高台部を設けるのみである。また，静岡県登呂遺跡の1号住居でみるように壁際の家屋材の下から踏台と考えられる板材が検出された例があり，踏板によって足元を拭っていたとの指摘がなされたが,本来こうした施設は常備していたと考えられる。

弥生時代の方形乃至長方形住居では円形住居(註7)に比べてかなり変化に富んだ出入口が出現してくる。表示した一覧表でみる限りでは妻入系よりも平入系例が多く，平入系の中でも方A－aタイプの階段状遺構を採用する例が多い。妻入系も存在するものの，平入系例が多い点は長方形の住居形態の場合，居住空間の利用度が優れていることに起因するとも考えられる。しかし，門田遺跡5号住居（文献8）や小園遺跡4号住居（文献16）のように明らかに妻側壁に出入口を設ける例もあり，必ずしも一様ではない。今後の類例を期したい。

古墳時代に至ると住居形態が殆んど方形となり方A－aタイプが減少し，方B－bタイプが顕在化してくると共に松木遺跡27号住居や塚堂E区6号住居でみる様に梯子式の平入系も採用される。今日北部九州地方で明確な梯子式の出入口は捉えられておらず，多少地域的に逸脱するが関東地方の宮の台期～久ケ原期にかけての竪穴住居跡に梯子の痕跡を残す例があり，梯子は1枚板を削り出し階段状にしたものである。

また，古墳時代初頭頃に比定される「□」状のベット状遺構(註8)を有す竪穴住居跡のベットが途切れた部分に付設する屋内土壙を住居の出入口の痕跡とし，梯子を固定するためのピットとする考え方もあるが，立野遺跡(註9)や薬師堂遺跡(註10)・金山遺跡で検証された様に弥生時代後期～終末にかけて普遍的に見受けられる屋内土壙（土壙内から砥石，石塊＝作業台の可能性，生産用具類の出土が多々認められることから作業土壙的色彩が強いと考えている。）とは別に出入口が発見されたこと，さらに，弥生時代中期後半頃から連綿と採用されてきた屋内土壙は古墳時代前期頃（カマド出現以前）までは踏襲されていたことを考え合わせれば，屋内土壙を出入口における梯子固定穴と考えるには無理があろう。

ここで問題となるのは方B－b（張出・妻入系）の楠野タイプである。このタイプは妻側と考えられる中央に幅2.00m，奥行80cm前後の張出し状をなし，基部に2本の上屋支柱穴を配している。この張出し部は農具類の収納場である納屋的用途も考えられ，立野135号住居でみられた様に弥生時代後期における農具類は一括集中管理システム的様相を示唆していたことも推考できる。5世紀初頭～前葉頃に比定される楠野集落の個別住居においては弥生時代のシステムとは相異る個々における管理へと移行した段階での収納場として各々の住居が農具を管理する納屋的張出し部を所有していたことも考慮されるため，今回は一応出入口として扱うが今後の類例に期したい。

次に出入口の住居に対する設置方向であるが，一覧表に記載した事例における出入口に関しては，必ずしも南側に設置してはいないようだ。一般的に住居の出入口は陽当りの不良な，しかも冬時には寒風吹き荒ぶ方向には設けないのが常識となっているにも拘らず，出土例で挙げた中には北側に出入口を付設する場合もあり，総体的に南側及び西側が多いが，種々な方向例がある。これは一集落領域内における個別住居の占有領域とそれに係る公共的広場と集落に通じる道，集落内の通路等に規制され出入口の方向が決定していたと考えられ，事実，合の原遺跡（文献1）で検証された集落においては集落に通じる登道方向に出入口を設けていたことからも推考できよう。

4．おわりに

以上，竪穴住居の出入口状遺構を概観してきたが，今回検証できた立野遺跡の様な出入口の

発見は稀で明確な把握はなされていない。概観した中で円形住居の出入口においては構造的に簡略的なタイプが多いと考えられるが，住居自体遺存不良な場合が多く不明確といわざるを得ない。唯一検証された合の原遺跡4号住居と谷頭遺跡6号住居では主柱が4本と8本という上部構造状の差があるものの，いずれ古代建築の分野での上屋構造が復原されるものと期待する。

これに対して方形乃至長方形の竪穴住居では住居を営む上での生活の知恵と創意工夫から種々な出入口が生み出された。出入口の構造，設置場所等から上屋構造に切妻造り，寄棟造り，入母屋造り等が考えられるが，現状での上屋構造は考古学の分野においては推測の域を脱し得ない。

古墳時代中期，特に北部九州地方ではカマドを付設する様になると，出入口は妻側(妻入系)に固定される様だ。例えば，赤井手遺跡59号住居(文献9)にみるカマドに対峙する妻側に張出し状の遺構を設けており，その部分の床面が硬く踏締められていたことから妻入系が考慮され，立野遺跡で数多く出土した6世紀代の竪穴住居の大半がカマドの対面に粘土の堆積が認められた事実からも同様の妻側（妻入系）出入口の可能性が強いといえよう。いずれにしても，弥生時代中期後半頃からカマド出現以前までの出入口の構造と設置方向は多岐にわたっていたが，カマドの出現と共に略固定化された方向に出入口を付設する様になると推考できる。このことは狭い住居内のカマドの煙を屋外に排出するための風道をつくる工夫ともいえよう。

ともあれ，考古学の分野で調査した下部構造のみからでは上屋構造の追求には無理があり，例え焼失住居である程度家屋材が遺存していたとしても然りである。古代建築学の分野からの一層の追求が期待される。

（佐々木）

註

1．佐々木隆彦「出土遺物からみた屋内土壙の機能について」（九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－(2)－）　福岡教育委員会　1983

2．註1に同じ

3．三輪町教育委員会『犬竹遺跡』（三輪町文化財調査報告書　第4集）　1985

4．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XI』　1977

5．カマドを付設する竪穴住居では，カマドは妻壁側に構築するのが普遍的であると考えられ，カマドの対面の妻壁側に屋内土壙（弥生時代の機能とは別と考えている）を設ける場合があり，カマドが出現した段階での竪穴住居では内部施設の配置に変革が生じたと考えられ，いかにカマドの出現が居住空間内の重要な位置を占めていたかが理解できよう。

6．小野忠熙「集落と住居」（新版考古学講座4原史文化―上―）　雄山閣出版株式会社　1969

7．日本考古学協会編『登呂』（本編）　1978

8．金関恕・佐原真編「弥生文化の研究」（弥生集落７）　1986

9．福岡市教育委員会『多々良込田遺跡III』　1985　報文によれば，19号住居は焼失住居として検出されているが，火を特に強く受けた部分は炉周辺と出入口と想定された屋内土壙付近で，火は出入口方向に吹出したため屋内土壙近くの焼痕が著しいとの指摘がある。このことは立野遺跡135号住居で検証した様に出入口が屋内土壙の傍に付設された場合当然起り得る現象であって，焼痕状況で屋内土壙を出入口とする根拠にはなり得ない。

10．1985年福岡県教育委員会調査

文献

1．福岡県教育委員会『合の原遺跡』（３号線筑紫野Ｂ・Ｐ関係埋蔵文化財調査報告　第１集）　1985

2．古賀町教育委員会『高木遺跡』　1983

3．多久市教育委員会『牟田辺遺跡』（多久市文化財調査報告　第３集）　1978

4．谷頭遺跡調査団『谷頭遺跡』　1978

5．広島県教育委員会『手坊谷遺跡』（県営駅家住宅団地造成地区内埋蔵文化財発掘調査報告）　1976

6．夜須町教育委員会『金山遺跡』（夜須町文化財調査報告　第４集）　1981

7．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XIX―』　1977

8．福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第７集上巻』　1978

9．春日市教育委員会『赤井手遺跡』（春日市文化財調査報告書　第６集）　1980

10．小郡市教育委員会『大板井遺跡II』（小郡市埋蔵文化財調査報告　第14集）　1982

11．福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―(1)』　1982

12．中原町教育委員会『姫方原遺跡』　1979

13．大野町教育委員会『大野原の遺跡』　1980

14．大分県教育委員会『ネギノ遺跡』（大分県文化財調査報告　第35輯）1976

15．大分市教育委員会『尾崎遺跡』1984

16．竹田市教育委員会『管生台地と周辺の遺跡』X　1984

17．福岡県教育委員会『塚堂遺跡III』（浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第3集）1984

18．那珂川町教育委員会『松木遺跡』（那珂川町文化財調査報告書　第11集）　1984

19．野津町教育委員会『野津川流域の遺跡Ｖ』　1984

20．大分県教育委員会『楠野』（大分県文化財調査報告　第63輯）　1983

21．『夏見台』　ニューサイエンス社　1967

第63表　竪穴住居跡出入口一覧表

No.	遺跡名	形態	構造	方向	時期	分類	備考	文献
1	福岡県 合の原 (4住)	――	階段	南東	弥生中期初頭	円C	円形住居	1
2	〃 (5住)	――	張出・階段	南西	〃	円B	〃	〃
3	福岡県 高木 (4住)	――	不・明	西	弥生中期後半	円A	〃 周溝が途切れ、小ピット2本	2
4	佐賀県 牟田辺 (47住)	――	〃	北	弥生中期前葉	円A	〃 上屋の支柱ピット2本	3
5	熊本県 谷頭 (6住)	――	階段	北	弥生中期後半	円B	〃 上屋の支柱ピット2本	4
6	広島県 手坊谷 (7住)	平入？	不明	南	弥生	円A	〃 棟持柱に直交する方向	5
7	〃 (12住)	――	〃	〃	〃	〃	〃 上屋の支柱ピット2本	〃
8	〃 (13住)	――	〃	南西	〃	〃	〃	〃
9	福岡県 金山 (12住)	平入 (中央)	階段	北西	弥生中期末	方A－a		6
10	福岡県 坊野 (2住)	〃	張出	北	弥生後期	方A－b		7
11	福岡県 西中ノ沢 (3住)	妻入 (南寄)	〃	東	〃	方B－b		〃
12	〃 (5住)	平入 (西寄)	〃	北西	〃	方A－b	納屋の可能性あり	〃
13	福岡県 門田 (5住)	妻入 (西寄)	階段か	〃	弥生後期末	方B－a	内側に2本の上屋支柱ピット	8
14	福岡県 赤井手 (12住)	平入 (中央)	階段	西	弥生後期	方A－a		9
15	〃 (16住)	〃 (北寄)	〃 ？	東	弥生後期末	〃		〃
16	〃 (82住)	平入	〃	南西	〃	〃		〃
17	福岡県 道添 (4住)	〃 (西寄)	〃 ？	南	弥生後期	〃		7
18	福岡県 大板井 (29住)	〃 (中央)	張出	西	弥生後期後半	方A－b		10
19	福岡県 立野 (135住)	〃 (西寄)	階段	南	弥生後期末	方A－a		—
20	福岡県 薬師堂 (12住)	平入？	〃	北東	弥生後期末～古墳初頭	〃		注10
21	福岡県 上々浦 (16住)	平入 (中央)	張出	北西	弥生後期中葉	方A－b		11
22	佐賀県 牟田辺 (50住)	〃 (南寄)	張出・階段	南西	弥生後期中葉	方A－a	立野135号住居と同タイプ	3
23	佐賀県 姫方原 (1住)	〃 (〃)	張出	西	弥生中期後半	〃		12
24	大分県 夏足原 (2住)	妻入 (中央)	造出	南	弥生後期前葉	方C		13

No.	遺跡名	形態	構造	方向	時期	分類	備考	文献
25	大分県 松木 (17住)	妻入 (中央)	造出	南西	弥生後期中葉	方C	削り出し	13
26	〃 (23住)	平入 (東寄)	不明	南東	弥生 (?)	方A-b?	2本のピット	〃
27	大分県 ネギノ (2住)	妻入 (中央)	造出	南	弥生後期末	方C		14
28	大分県 尾崎 (8住)	?	階段	西	弥生後期後半	?	6角形住居	15
29	大分県 上今 (1住)	妻入? (西寄)	張出・階段	北	弥生後期末	方B－b		16
30	〃 (2住)	平入 (東寄)	階段	〃	弥生後期末～古墳初頭	方A－a		〃
31	大分県 小園 (4住)	妻入 (中央)	造出	南	弥生後期後半	方C	本来は階段であったと考えられる。	〃
32	〃 (13住)	平入 (〃)	張出	西	弥生後期末	方A－b	内側に2本の上屋支柱ピット	〃
33	〃 (109住)	〃 (西寄)	階段	南	弥生後期後半	方A－a		〃
34	福岡県 道添 (12住)	妻入 (東寄)	張出	〃	古墳前期	方B－b		10
35	〃 (14住)	〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	No.34と同タイプ	〃
36	福岡県 上々浦 (8住)	平入 (北寄)	階段	東	古墳中期	方A－a	階段部に炭化物	11
37	〃 (9住)	妻入 (西寄)	張出	南	古墳前期	方B－b		〃
38	福岡県 塚堂E区 (6住)	平入 (中央)	梯子	〃	〃	方D		17
39	福岡県 松木 (27住)	〃 (〃)	〃	〃	古墳初頭	〃		18
40	大分県 小園 (5住)	妻入 (中央)	階段	西	〃	方B－a		16
41	大分県 池部 (2住)	妻入 (中央)	造出	〃	古墳前期	方C	内側に2本の上屋支柱ピット	〃
42	大分県 下藤(A－16住)	平入 (東寄)	階段?	南	〃	方A－a	住居内に浅い掘込みと上屋支柱ピット2本	19
43	大分県 楠野(C－1住)	〃 (西寄)	〃	〃	〃	〃	ローム粘土による貼付け。立野と同タイプ	16
44	〃 (C－5住)	〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃
45	〃 (1住)	妻入 (中央)	張出	東	古墳中期	方B－b	内側に上屋支柱ピット2本	20
46	〃 (5住)	〃 (〃)	〃	〃	〃	〃	No.45と同タイプ	〃
47	〃 (12住)	〃 (〃)	〃	西	〃	〃		〃
48	千葉県 夏見台 (15住)	〃 (西寄)	〃	北	〃	方B－b	上屋の支柱ピット2本	21